慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	我々の寺から僧院の寺へ : ブータンにおける寺守りの世界と共同体の変容
Sub Title	From 'our temple' to 'the monastery's temple' : Transformation of the world of konyer (temple's care taker) in rural Bhutan
Author	宮本, 万里(Miyamoto, Mari)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学 (The Hiyoshi review of the social sciences). No.29 (2018.) ,p.11- 22
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10425830-20190331-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

我々の寺から僧院の寺へ

――ブータンにおける寺守りの世界と共同体の変容――

宮　本　万　里

1．はじめに――ブータンの寺守り

ヒマラヤの仏教王国ブータンの西，オグロヅルの越冬地として知られるポブジカ谷の湿原，その中央に静かに佇む古い寺がある。寺には近くの村に住む一人の老夫が毎夕やって来る。彼は日没前に寺に到着すると朝に捧げた水を捨て，灯明を灯し，祭壇に祈りを捧げる。そして，闇に響く猪避けの咆哮を遠くに聴きながら着物をほどき，それを布団として眠る。翌朝，夜明けとともに再び新鮮な水を祭壇に供えると，マントラとともにサン (お香) を捧げ，再び自分の家族の待つ村に帰っていく。

ゾンカ語で一般にコンニェル（dkon gnyer）と呼ばれる寺守りは，男性だけが担うことができる仕事であり，ブータン各地に建てられた寺のほとんどに配置されている。コンニェルは，祭壇の神々に対するこれら朝夕のつとめを確実に果たし，寺の貴重な仏像や仏具，経典などが盗まれたり傷つけられたりしないよう管理する義務を負う。また，寺に参拝者が来た時には本堂の入り口の鍵を開け，参拝者の祈り（五体投地）が終われば，祭壇に置かれた清めの聖水を彼らの手のひらに注ぎ，祝福を与える。

コンニェルが朝夕の務めに遅れると，それは共同体の罪となり，災いをもたらすと考えられている。寺に祀る神々が古く強力であればあるほど，もたらされる災いも大きい。したがって，コンニェルに任命された者は，その任期の間，長期間村外に出ることも，開墾や猪避けのために畑に建てられた小屋[1]で夜を明かすことも，もちろん遠方へ放牧に行くことも許されない。そんなことをすれば，朝夕の祈りに間に合わなくなってしまうからだ。

コンニェルが払うこれらの犠牲に対して，他の村人は多くの場合，収穫物の再分配という形で対価を支払ってきた。上の寺の場合，ブータンの計量法で８デェ[2]の籾殻つ

きの小麦が一年ごとに各世帯から集められ，寺守りの生活の足しとされた。一般にこの穀物を供出する人々が当該の村寺に一義的に属する共同体を形成しており，ブータン暦[3]で毎月10日，15日などに行われる仏教聖人グル・パドマサンヴァバのための法会や，年に一度の村祭り（ツェチュ祭[4]）を共同で組織する。

ブータンでは，ある程度の規模の村であればしばしばこうした村寺の存在が確認できる。寺を囲むように家々が配置され，人々は折に触れて寺に集まり法要を行い，神々に祈りを捧げる。旅立ちの折には土地の守護神に無事の帰還を祈り，家族が病に倒れればその回復を願い祭壇に蒸留酒やバターの灯明を捧げた。寺は村落共同体の人々を繋ぐ紐帯であり，村の平安や繁栄を紡ぐ要であったのだ。だからこそ，その維持と管理は共同体の責任において選ばれたコンニェルの手によって行われ，寺守りを務める期間は共同体内の労働交換や労働徴発など様々な義務を免除された。

しかし，こうした寺守りの仕事も，近年担い手不足に直面している。近代教育の普及が比較的穏やかに進んだこの社会でも，近年は子供を僧院よりも近代学校に預けることが一般化し，村に留まって地域のラマに教えを請う者も稀だ。では，寺守りを失いつつある村寺は現在どのようにして管理され，共同体の紐帯としての役割はいかに変容しているのだろうか。本稿では，その存在が自明である一方で内実が十分に明らかにされてこなかった仏教社会ブータンの村寺の存在に注目し，共同体による管理の方法と，僧院組織による近年の介入の影響を，部分的にではあるが描出してみたい。

なお，本論文では2004-05年実施の長期滞在調査で得られた聞き取りデータを村落理解の基礎資料としつつ，それ以降の変化については現在まで継続的に実施している夏期および冬期現地調査で得られたデータを参照することとする。

2．湿原の寺を守る人々

本稿では，上述の課題を検討するため，筆者の調査村から数例をあげて比較考察を行う。はじめに，2005年の調査データからポブジカ谷のＫラカン（寺）と周辺の共同体数村の関係性について整理し，次に現在の寺管理の担い手とその手法について考察する。

ポブジカ・ゲオッグ[5]は，Ｕ字谷の底辺をなす湿地を囲むように点在する無数の小さな村で構成されている。小さな集落が，生業や言語によってさらに細かく分断され，

地理的には隣人にみえる人々が，互いに別の共同体の帰属民として認識されていることも多い。

上述の寺もまた，長い間湿原を囲む10あまりの小さな村々によって共同で管理されてきた。これらの村人は，一般にポブジカ谷の湿原に最も古くから定住する者たちとして紹介されてきたが，実際には冬の間家畜とともに温暖な低地に移住する者たちを多く含んでおり，必ずしも定住的な世帯だけで構成されるわけではなかった。以下では，寺に近い二つの村の聞き取りから，村の生業と構成，寺の管理や人々の信仰実践とその変遷を辿ってみたい。

（1）K村

この寺に最も近い湿原の底部に家々を構えるのがK村だ。村は3世帯から構成され，木枠に入れた土を上から踏み固めて作るという伝統的な壁構造を持つ3階建ての大きな作りの家が並ぶ。2005年の調査時，これらの村は寺のコンニェル（寺守り）に対する支払いのほか，寺で行われる儀礼にも多くの寄付を行っていた。これら仏事への寄付はゲワと言われる善行にあたり，ある老婦（女性・80代）は自らの世帯が村で最も貢献しており，寄付額が大きいと主張していた。彼女は同時に，それらの儀礼に対する隣村（G村）の住民の貢献が小さいことを訴えていた。「水田を持っているくせにバターランプの一つも持ってこない」となじる彼女の言葉は，集落内に水田を持つ者と持たざる者がいること，そして水田を持つ者たちが豊かだと考えられていること，さらにK寺での日常的な儀礼が必ずしも10村の村民全ての合意や貢献のもとで行われているわけではいことを示唆していた。

この村の人々はヘンケと呼ばれるポブジカの地方語を話し[6]，全世帯が牧畜と農耕の両方を並行して行う半農半牧の生業形態をとっている。例えば上述の女性の世帯では2005年当時，牛を23頭，馬を1頭，羊を20頭，雄鶏を2羽飼育しながらポブジカ谷に定住していたが，同時にワンディポダンの低地[7]に水田を所有しコメを自給することができていた。この世帯は，水田を持つが冬季の季節移動を行わないという特徴を持つ。そして，世帯の定住性を跡づけるものに羊の飼育がある。ヤクに似て寒冷地にしか生息できない羊は，温暖な低地に連れて行くことはできない。したがって，羊の飼育が寒冷地で定住的な生活を選択する者たちの一つの指標となっていた。羊はときに供儀のための犠牲獣となるが，基本的に羊毛の採取を目的に飼育されていた。老齢の夫の

ほか婚出した息子が仮住まいしているだけで人手が十分でないため，当時この世帯の羊の放牧は，コメやコムギ，布などを対価として山側の村の牧畜民に依頼していた。採取された羊毛はポブジカ谷よりも東側の高地に位置するセフ・ゲオッグや寒冷なブムタン県の牧畜民や農民へ販売していた[8]。他方でＫ村の他の二世帯は，低地に水田を所有していたが，羊を飼育せず，冬季は低地に移住するトランスヒューマンスの慣習を実践していた。これらの世帯は羊を飼育しないかわりに食用に豚を数頭飼育しており，年法要の際にはそれを屠って食した。

Ｋ寺を見守るこの村の住人たちも，その３分の２が冬季に谷を出て南へ下る季節的移住民であった。冬の間，Ｋ村で唯一移住を行わない１世帯は，オグロ鶴の越冬地である湿地で日々鶴の鳴き声とともに夜明けを迎え，春を待つ。そして冬の間の寺の管理もまた，それら定住者に一任された。

（２）Ｇ村

Ｇ村もＫ村と同じく，ポブジカ谷で最も古い村の一つとされる。自動車道路が作られた谷の北西側（小さな商店街を構成している）から湿原を走る川を渡った南東側の山裾の集落であり，Ｋ寺の背後に位置する。村は12世帯で構成され，こちらも３階建ての堅牢な作りの住居が多い。2002年の調査時に初めて訪問した後，断続的に聞き取り調査を行ってきた村の一つであり，これまで９世帯にインタビューを実施している。

Ｋ村と同様，村人は定住型の住民と，季節移動型の住民の二つに分けることができる。インタビューを行った９世帯のうち８世帯が同じ県内の低地の村（ジェナ郡Ｔ村）に水田や畑をもち，そのうち６世帯が2005年当時も自分たちで耕作を行っていた。残り２世帯のうち，１世帯は人手不足などの理由で耕地を放棄，ほか１世帯は耕地を親族に貸与していた。水田耕作を継続していた６世帯は，毎年秋頃（ブータン歴の９月から11月の間）に家畜とともにＴ村のある低地へ向かって移動し，翌年春（ブータン歴の３月）にポブジカ谷へ戻る。

しかし，Ｋ寺の寺守りへの支払いは，季節的な移住の有無にかかわらずＧ村の全世帯に課せられた義務であった。季節的移住をして谷を離れる者たちは，コンニェルにはなれないためその義務を免れたが，代わりに，例えば村祭りでもあるツェチュ祭の時には，チャムと呼ばれる奉納の仮面舞踊の舞い手を務めた。

チャムは一般に指導者の下での集合的で継続的な訓練を必要とするため，村人の全

面的な協力が欠かせない。また，より儀礼的な色彩の強いあるいは物語性の高い静的な踊りから，より跳躍の多い躍動的な踊りまで，多様な演目を実施するため，踊り手の年齢層も中堅から若手まで幅広く必要とされる。G 村の比較的多い世帯数と構成人数は，それを可能としていた。

こうしたツェチュの他，地域の仏教寺の必要性が増すのが，ブータンのほとんど全ての世帯で行われる土地神への年法要（チョク）である。G 村では全ての村人が低地から戻るブータン歴 7 月に行われていた。チョクは 1 年間の土地神の守護への感謝と次年の豊穣や健康を祈る意味合いが込められており，親族はもちろん近隣の村人も招かれて参加し，その際には自家製の酒と肉入りの食事が振舞われる。法要の場所は，住まいと村寺の両方で行われることも少なくない。読経は僧侶によって執り行われたが，K 寺には僧侶がいないため，谷の入り口にあるガンテ僧院（ニンマ派）の出家僧や在家僧が招聘された。季節移動をする世帯は，12月ごろに異動先の村でもチョクを行い，その土地の土地神を祀る。その場合は，低地の村に近い県中央僧院（カギュ派）から僧侶やラマを招聘した。

儀礼の際の僧侶に関する選択は，どの地域をとっても非常に柔軟性が高い。僧院内で意識されている宗派の差異（カギュ派やニンマ派などの違い）や，出家僧と在家僧の境界もそれほど気にすることはない。儀礼を司るラマの資格を持つ僧侶の存在は重要だが，それ以外の僧侶はどこからでも必要な数集まれば良く，その数は当然世帯の経済力にも依存する。土地神に関する知識は重要であるが，関連する経が読めれば効果に問題はないとされた。ルーティン化された法要において仏教僧は取り換え可能な存在であり，仏教が普遍的な宗教として純化されればされるほど，その感覚は強くなっているようにみえる。

他方で，村寺への帰属と管理という点に戻ってみてみると，G 村の人々は一年の半分を過ごす低地の村にも共同体で管理する村寺を持ち，その寺守りに対する報酬の支払い義務も有していた。先に述べたように，K 寺の寺守りに謝礼として年間 8 デェの麦を支払う一方で，移動先の寺の寺守りにも年間およそ 3 デェの米を支払っていた。居住地の寺への帰属意識は，その寺の僧侶が誰かという点よりも，寺が自らの居住地に関連する土地神を祀り，神々と共同体とを媒介する場を提供することによって醸成されるといってよいだろう。

（3）大僧院による管理へ

コンニェル（2005年当時）が語る伝承によると，K寺の歴史は14世紀まで遡り，当時チベットからきたとする一人のラマ（Tulku Penjor Gyeltsen）によって建設されたという。ラマはまず小さな石臼を作り，村人から受け取った籾付きの穀物を挽いてその労賃を建設資金とし，この湿原の寺の基礎を築いた。同氏によれば，「寺は湖の上に建設された」ためしばしば床下から水が上がり床板を汚したが，その後改築が進み，夜も安心して滞在できるようになったという。とはいえ，2005年の時点では床はまだまだ隙間の多い簡単な板敷でできており，ラマが座る椅子や演奏などに使う仏具も十分には整えられていなかった。電化も進んでいなかった当時，小さな石油ランプと祭壇のバターランプだけが夜闇を照らす灯であった。しかし現在，そうした寺の様子は様変わりしている。

2011年に再び寺を訪ねた時，以前にみた寺守りの老夫の姿はすでになかった。それだけではなく，寺の本堂の床板はきれいに張り替えられ，無数の仏が描かれている壁の壁画は，政府管理の多くの寺院でみられるように仏事で使う黄色い布で覆われていた。寺は袈裟を着た出家僧によって管理され，座ってインタビューを始めると少年僧がお茶とお菓子を持って入ってきた。以前，寺守りが一人で夜を過ごした寺には，数名の少年僧とその師となる若い出家僧が住んでいた。10村の男性が持ち回りで寺守りを担い守られてきたこの寺は，2007年に村人の側からガンテ・トゥルク[9]に願い出て，ガンテ僧院の直轄寺となったという。

K寺のコンニェルとなった僧侶は，援助を集めて寺を改築すると，次に，寺の横に小さな寄宿施設を建設した。近隣の村落から少年たちを修行僧として手元に引き取り，施設を彼らの住居としたのだ。その公募に応じた少年たちは，近代学校を中途退学した者や，親が仏教僧になることを勧めた者など多様であった。本堂の入り口には寄付箱が置かれ，僧院の将来像が示されている。共同体が守ってきた小さな村寺は，大僧院から派遣された若い僧侶によって拡張され，刷新されつつ，僧院システムの一部に組み込まれつつあった。

さらに7年後の2018年に再訪した際には，寺の様子はさらに様変わりしていた。本堂は最古の祭壇部を残して大きく改築されて拡大し，村人が集う村寺としての機能以上に，多くの僧侶が並んで読経ができる僧院としての機能が前面に出されていた。また，本堂の背後にも新たな構造物が建築中であり，2011年の調査時とは異なる僧侶が

「K 僧院」を管理していた。

現在，僧院を中心的に管理する僧侶によると，僧院はガンテ・トゥルクがその傘下に加えた42余りの寺の一つであるという。それらの寺はガンテ僧院出身の出家僧[10]らに管理を委託され，多くが少年僧のための寄宿施設を持つ僧院へと改変されている。しかし，それらの寺院の運営費は必ずしもガンテ僧院から供出されているわけではなく，一般からの寄付や僧侶たちの自助努力に依っている。例えば，K 寺を最初に任された僧侶は，当初寺の改築費用をポブジカ谷を訪れる観光客や都市部の居住者などの寄付で賄おうと試みていたが，のちに境内に近い場所に線香工場を設立し，商品の売り上げから資金を獲得する方法を模索した。しかし，湿地の特性から工場はうまくいかず，現在は空港に近いパロで土産物屋をして運転資金を調達する方法を模索中しており，ポブジカから離れた首都近郊に居住している。

こうしたポブジカ谷の古寺の事例からは，著名な転生僧を頂点とする大僧院による村寺の吸収という現象と，自由主義化する経済体制の下で自活の道を模索する個々の僧侶たちの営為をみて取ることができる。それは他方で，住民の間での寺守り（コンニェル）の真正性についての考え方や，寺への帰属意識の変化を表してもいるだろう。つまり，正規の仏教教育を受けた出家僧の方が，地域の生態環境や社会関係を熟知してきた村の古老や在家僧よりも寺守りとして有益で正統だ，とする考え方が広く共有されつつあること，そして，寺を地域共同体の固有の紐帯および土地神との結びつきの媒介とする考え方が薄まっているということだ。

3．ノラのいる寺

ブータンでは，2000年代の終わり頃から各地でこうした現象が起きはじめていた。たとえば東部モンガル県の寒冷地にあるＳ村でも，村の中心部に置かれている古い村寺にモンガル県庁付属の僧院から若い僧侶が迎え入れられており，彼もまた村の少年達を修行僧として受け入れ，寺を僧院として拡張しようとしていた。

牧畜を生業とするこの村では，村のツェチュは家畜が南へ下る前，夏の終わりに行われる。村には土地の神々が訪れたという伝承をもつ特別な３軒の家があり，厳格な式次第を遵守することで村の安寧と繁栄は守られると信じられていた。ノラ（牛の神）と呼ばれる家畜の守護神への奉納儀礼はその中でも特に重要視されていた。境内

の石畳では村の男性が総出で仮面舞踊を組織し，祭りの終盤になると各家の女性達は魔法瓶に入れたお茶と様々な手製の菓子類を本堂に持ち込み，最後の読経が終わるとそれらの茶と菓子を親族や隣人達と分け合い，互いの労をねぎらい，貢献の多い者たちに感謝を伝える。読経は村の在家僧とモンガル僧院から招聘された僧侶で行われていたが，その中で祭壇を守り管理するのがコンニェルの重要な仕事のひとつであった。しかし，村人から選ばれたコンニェルはもういない。その役目は政府系僧院から派遣されたカギュ派の僧侶によってとって替わられている。

ワンチュック王朝の初期に王の奴隷らが送り込まれ，輸送路の中継地として建設されたという伝承をもつこの村は当初３世帯から始まり，のちに21世帯まで拡大し，牧畜業を中心に発展を遂げた。南の放牧地を連帯して購入するなど，村の結束や組織力は高く，寺の境内や堂内も管理が行き届いていた。しかし，そうした村でも寺守りを維持することが負担となりつつあったようだ。村の中でも所有する家畜頭数が多く，豊かとみなされていた村人（70代，女性）も，「ゲロン（出家僧）がいてくれれば安心だ」とし，県の僧院に管理を依頼したことで（自分たちから）コンニェルへの支払い義務がなくなったため「嬉しく，ありがたい」という。彼女によれば，在家僧（ゴムチェン）や少し経が読めるだけの村人をコンニェルとして置くよりも，正当な仏教教育を受けた僧侶（ゲロン）が寺を守ってくれるにこしたことはなく，さらに村人の経済的な負担が軽減されれば文句はなかった。

４．グル・パドマサンバヴァの守る村

しかしながら，全ての村が自分たちの村寺を管理する伝統的な権利を放棄しているわけではない。例えばポブジカ谷からブラックマウンテン山脈を横断した東側，トンサ県南部のＮ村では，８世紀後半のグル・パドマサンバヴァの時代に建設されたとする古寺が村人の手によって現在も守られている。この寺は，グル・パドマサンバヴァが悪霊の注意を逸らしている間に，その妻の一人が手ずから建設したとされる。寺の内部にはグル・パドマサンバヴァが土地神と当時の王の争いを調停した際に立てたという誓いの石柱がそのまま残されている。荒ぶる神々を収めた秘仏殿を含む祭壇部には男性以外入ることが許されず，その力が強いために，寺を守るコンニェルの責任も非常に重い。

定住民と移動民の両方が入り混じる多数の村によって寺が管理されていたポブジカ谷の事例とは異なり，N 村の寺は一つの村の全ての世帯によって連帯して管理されており，村人にとって日常的かつ唯一無二の儀礼空間として機能してきた。村は，周囲を河川に切り取られ，それゆえに山間に浮かぶ台地のような形状をしており，なだらかな傾斜を持つ。寺はその傾斜の中間に位置し，ちょうど集落が外部世界とつながる境界を守るように村の入り口に佇む。村を離れる者は必ず寺に参拝して旅の無事を祈り，村に戻った者は無事の帰村を報告し感謝の祈りを捧げる。寺に祀られる神々の力が大きいだけに，村で生まれた者は皆，その影響を受ける存在とされる。

それらの神々は人々の守護神であり，同時に畏れの対象となる。病人が出ると家人は患者に代わり，アラと呼ばれる自家製蒸留酒とツォと総称される米や炒り米，揚げ菓子などの供物を竹かごに入れ，まずは寺と土地神の祠に奉納して神々の怒りを鎮め，許しを請い，回復を祈る。この儀礼の効果がない時に限って，村人は他の呪術や近代医療へ助けを求めた。

寺はまた，様々な儀礼を行う場を提供する。ブータンでは多くの家で仏間が作られ，部屋の壁一面に祭壇が作りつけられることも珍しくない。豊かな家は仏画師を雇って仏間の四方の壁に仏画や装飾を描かせ，色彩豊かに装飾された仏壇には様々な仏像を安置する。他方で，転生僧の写真や小さな仏画，あるいは仏画が掲載された新聞やカレンダーの切り抜きを壁に貼り，香炉を置いただけの壁面の小さな棚が祭壇の用をなす家もある。N 村でも仏間や仏壇を持たない家は多く，そうした世帯にとって寺はチョクや厄払いなどの法要を行うための重要な場を提供していた。住人は主に寺の本堂で僧侶に経文をあげてもらい，家に招く代わりに家から茶や食事を運び，仏教僧たちを労う。

N 村の村人にとって村寺は日々の生活と祈りの場であり，寺の本堂は自宅の仏間の延長線上にあると言っていいだろう。ゆえに，村人にとって寺を村人以外の他者の手に委ねることは難しい選択であった。一時期のカルダモン栽培などで財を得た世帯がいた一方，ほとんどが貧困世帯とみなされてきた N 村では，ポブジカやモンガルの寺より村寺を自主管理する経済的負担は大きかったが，村議会では政府直轄の僧院に委ねる案に多くの村人が反対した。ツォクパ（村代表）を務める村人（男性・30代）は，その理由を，村外の僧侶などに管理を任せた場合「寺に入りたい時に入れないと困る」という意見が出たためと説明する（2018年調査）。

2008年以降，この村でも寺の設備が新たに整えられたり，新調されたりしてきた。例えばチャムの仮面や衣装を保管する小屋の新設や，屋根の相輪の新調，ツェチュ祭の最終日に開帳されるトンデル（巨大なパッチワークの仏画）の作成などが含まれる。その一部は，他地域の例に似て，N 村出身の出家僧が音頭をとり，都市住民などから寄付を集めて実施された。しかし，村人は寺を外部の他者の手に委ねることはせず，共同体に固有の信仰の空間として村のコンニェルの手で管理し続けることを選択した。

5．おわりに

一旦管理権を地域の大僧院に所属する出家僧らに委託してしまうと，寺に対する所有意識や所属意識は大きく変わっていく。2005年の調査時にみたコンニェルたちは皆，村に残された初老の男性やゴムチェンたちであった。それらの村では，限られた適当な人材の中から，個人の体力や家族構成などによって人選が行われていた。モンガルの村では寺のすぐ近くに集落が形成されていたが，ポブジカ谷の寺は所属する多くの世帯が徒歩で数十分から一時間ほど離れた場所に家を構えていたため，コンニェルは日没後の帰宅が困難となり，家族から離れて寺に寝泊まりする場合も多かった。そして結局これらの村では，自ら寺の管理権を手放して大僧院の傘下となり，出家僧が定める規律の中で，村人もまた自らの宗教実践や慣習を再構築していくことになった。

寺の修繕や管理，年間の法要の日程についても，正規の仏教教育を受け「正しい仏教知識」を持つ出家僧らが決定権を持つようになると，それまで主導権を持っていた共同体のゴムチェンや古老たちもその決定に従属的な存在となる。寺の由来についての知識やそれを後世に伝える役割も，出家僧こそが正しい知識を持つ者と認められ，その役割を独占するようになっていった。

他方で，トンサ県の事例では，寺との結びつきを手放すまいとする人々の営為により，寺は共同体のものとして残されている。収穫期を終え農閑期に入ると寺では常に何かしらの法要が行われ，ツェチュの時期には遠方に住む家族が皆村へ戻り，続く数週間の間，連日のように各家での年法要が執り行われる。農繁期にも陰暦の十日や十五日には必ず寺で法要が行われ，アラやツォを持ち寄り，寺の周囲を周回する行為（コラ）を行う人が後をたたない。

K 寺や他の多くの村寺では現在，出身僧院の仕事や都市での寄付集めなど，忙しく

働くロポン（ゾンカ語で教師を意味し，地方の寺の管理者となった出家僧）が外出しているために，日中本堂が施錠された状態であったり，修行中の少年僧がコンニェルの役割を果たすことも多い。このように，村人にとって日常的なアクセスが制限される状態は，村寺への心理的な距離をも作り出している。

2008年の民主化と前後して政府が自由主義経済へと漸進的な転換を試みる中で，ブータンの仏教界もまた大きな変化にさらされている。国会での僧院留保議席を廃止し，宗教者から選挙権を剥奪することで政治の世俗化が図られるなか[11]，政府系僧院や私立僧院は国外での布教活動や資金獲得を試みながら独自の発展経路を模索している。

国内でも中間層が生まれるようになると，高僧による大規模な灌頂儀礼や説法に遠方からも多くの信者が集まり，集合的な放生儀礼を行う事例も多数散見されるようになる[12]。地域のネットワークや生活圏を超えてより徳や正統性が高いとみなされる高僧や儀礼へと直接的に接続しようとする近年の趨勢は，村落地域で強固に維持されてきた村寺と共同体とのむすびつきを相対的に弱め，自律的に守るべきものであった〈我々の寺〉をどこかよそよそしい客体へと変質させつつある。

注

1　ブータンの農村部の多くでは害獣を追うために畑の中に高床の小屋を建てて寝ずの番をする。

2　木や竹を曲げて作った蓋のない円柱型の軽量容器。穀物などの現物で税が支払われていた時代には，この容器を基準に計量法がつくられた。

3　陰暦を基盤に吉祥を占う専門の僧侶らによって決められたブータン独自の暦。

4　多くの村で収穫後の月の10日に行われ，仏教説話を描いた仮面舞踊（チャム）を伴うことが多い。

5　ゲオッグは県の下位の行政区であり，その下に複数村が含まれる。ゲオッグの長をガップ，副長をマンガップあるいはマンミと呼び，彼らは５年に一度の地方選挙で選出される。

6　丘陵部のガンテ地域の人々がメンケと呼ばれるゾンカ語に非常に近い言葉を話す一方で，ポブジカ谷では約９種のヘンケが話されているとも言われる。

7　ティキザンパおよびナワンと呼ばれる地域。

8　2005年当時，羊毛１kgあたり50-60Nuのレートで取引されていた。

9　転生僧・化身（トゥルク）として認められる高僧で，ガンテ僧院の長であり所有者。現在のガンテ・トゥルクは第９代にあたる。海外から多くの援助を集めて僧院の再建し，（仏教僧の）高等教育機関を建設するなど，積極的な活動的で知られ，門下の修行僧や信者を増やしている。

10　管理者となる僧侶は，ロポンあるいはケンポとして認められる段階まで修行を終えた者に限られ，なるべく出身地域に近い寺へ派遣されるとのこと。

11　詳しくは宮本（2017）を参照のこと。

12　詳しくは宮本（2017）を参照のこと。

文献

宮本万里「現代ブータンにおける屠畜と仏教―殺生戒・肉食・放生からみる「屠畜人」の現在について」『ヒマラヤ学誌』15号，pp. 72-81，京都大学，2014年 3 月。

宮本万里「現代ブータンのデモクラシーにみる宗教と王権：一元的なアイデンティティへの排他的な帰属へ向けて」名和克郎（編）『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相：言説政治・社会実践・生活世界』，pp. 525-554，三元社，2017年 3 月。